

# エジプトの土器づくり民族誌

## —土器生産様式に関する民族考古学的検討—

齋藤 正憲

Ethnography of Pottery Making in Egypt:  
An Ethnoarchaeological Study on the Modes of Pottery Production

Masanori SAITO

土器生産様式について考察するべく、現代エジプトにおける土器づくり民族誌を検討した。民族誌にもとづく限り、a 世帯内生産、b 個人工房生産、c 集合工房生産、d 共同工房生産、e 従属専門生産の5つの生産様式を見出すことができた。さらに、a 世帯内生産からe 従属専門生産への変容に伴って、土器製作者は女性から男性へと変わり、工房は大型化し、立地は集落内部から外部へと移っていく傾向が観取された。その上で、民族誌から描き出された生産様式のモデルについて、具体的な比較に耐え得る工房の占有面積や立地という観点から、考古資料に照らし合わせてみた。結果、民族誌モデルは考古資料に符合する部分が少なくなく、古代土器生産の実態を考える際、重要な視点を提供し得ると判断された。

キーワード：エジプト、土器づくり民族誌、土器生産様式、民族誌モデル、民族考古学的研究

In this paper, the data from seventeen pottery workshops in modern Egypt are examined in order to draw the ethnographic model of pottery production. Based on the ethnographic data, the following five modes of production were recognized: (a) Domestic production or industry, (b) Individual workshop, (c) Assembled workshops, (d) Corporative workshop, (e) attached specialist producers. With the change of these modes from (a) to (e), the female potters are gradually replaced by males, and each workshop is generally enlarged in scale. The location of workshops also shifted from the inside of the settlement to the outside. As for the scale and location, the ethnographic data substantially corresponded with the archaeological evidence. These affinities between ethnographic and archaeological data indicate that the above mentioned modes of production could have operated in ancient times. It is, therefore, concluded that the ethnoarchaeological research on modern workshops certainly provides suggestive evidence that shows the organization of the ancient potters.

Key-words: Egypt, ethnography of pottery making, modes of pottery production, ethnographic model, ethnoarchaeological research

### 1. 問題の所在

古代エジプトの高度な工芸技術を支えたのは、いうまでもなく、名もない職人たちである。彼ら／彼女らの確かな技術の発露は、壮大な建築物から、精緻な工芸品に至るまで、多岐に及ぶ。そのうち土器文化は、質量両面において刮目すべき研究対象である。遺跡から膨大に出土する土器は年代決定の重要な指標となるばかりか、たとえば新王国時代の青色彩文土器などは、工芸技術の到達点を示すマスターピースでもある。

かくも重要な位置を占める土器文化ではあるが、土器がどのように製作されたかについてはあまり研究が進んでいない。そもそも文献史学が主流を占めるエジプト学におい

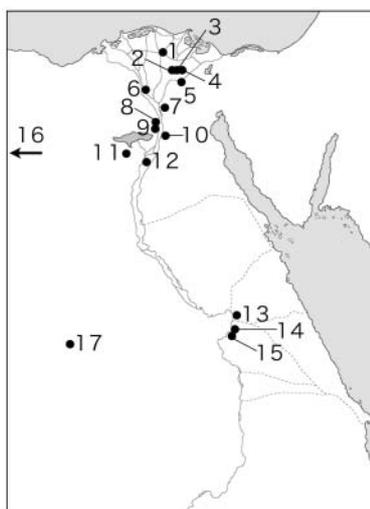
て、土器研究は傍流に甘んじてきたのが実情であり、土器生産様式にまで踏み込んだ研究事例となると限られてしまうのではあるまいか。そもそも墓域の発掘を中心としてきたエジプト考古学では、土器生産地の考古学的研究は大きく立ち遅れている。加えて、情報量豊富な壁画資料や模型資料も、少なくとも土器づくりについては、特定の生産様式を示す偏ったものである可能性を否定できない (cf. Bourriau et al. 2000: 141) さらには、古代エジプトの土器は素焼きであるために各種の化学分析も効果が薄く、胎土分析を徹底するには分析の蓄積に乏しい。つまり、既存の資料・研究成果から土器製作の実態に迫ることは極めて困難な状況にあるといえる。

そうした中、エジプトの土器研究者が古代の生産様式を具体的に思い描く上で雛型としたのは、民族誌にもとづく類型であった (Bourriau et al. 2000: 141; Rice 1987: 183-186)。生産様式 (modes of production) を可能な限り分類しようとした意欲的な試み (Peacock 1982: 8-11) を端緒とするこの分類は、大いに参照すべき内容を備えている。ただし、世界の民族誌を広く扱う中で構築されたこのモデルを、そのままエジプトに敷衍させることには躊躇を禁じ得ない。古代エジプトの土器生産様式を民族考古学的に検証しようという試みは、エジプトの民族誌に立脚してこそ意義があるであろう。一方で、エジプトにおける決して少なくはない民族誌的既往研究は (cf. Nicholson and Patterson 1985; Nicholson 1995b, 2002; Kooij and Wendrich 2002)、ごく少数の事例に依拠するものがほとんどで、民族誌的情報を体系的に扱ったものは少ない (cf. Redmount 2002)。

以上を鑑み本稿では、まずはエジプトで収集された17の民族誌事例を概観する (図1)。その上で、既に提示されている民族誌モデルを検討・修正し、新しいモデルの構築を目論んだ。

## 2. データの概要

本稿で扱う土器工房の概要は以下の通りとなる。なお、水簸施設は単槽式 (写真7; Arnold and Bourriau 1993: Figs.2A,B) と2槽式 (写真8) が確認される。焼成窯では開放的な窯と天井を有する密閉度の高い窯が存在する (齋藤 2007: 41)。開放型窯では、いわゆる筒窯 (写真9) と頂部に向かって窯壁が段階的に狭まる半開放型の窯 (写真10) が確認される。密閉窯に関しては、頂部がドーム状につくられるタイプ (写真11, 12) とフラットな天井



- 1: サマンヌード
- 2: ザンカルーン
- 3: ガウィーシュ
- 4: マシ・ハーディー
- 5: ビルベイス
- 6: グレース
- 7: シャーイット・ターバーン
- 8: アブ・ラグワーン
- 9: アイヤート
- 10: ヘルフ
- 11: ナズラ
- 12: ザラタ
- 13: ヒガーザ
- 14: メダムード
- 15: ファクーラ
- 16: シーワ・オアシス
- 17: ダクラ・オアシス

図1 エジプトの土器工房

を呈するタイプ (写真13, 14) に細分し得る。成形は蹴りロクロ (写真15) でなされることが一般的であり、一部で叩き成形 (写真16; 齋藤 2005) が認められ、さらに、女性が補助的な作業を担うケースもある (写真17)。

本稿では土器生産様式の検討に焦点を当てたため、土器製作技術については詳述を割愛し、その概要を明記するとどめた。

### (1) サマンヌード

デルタ地帯中央に位置するサマンヌードには、トータル40ほどの土器工房が存在するといひ、通年で土器づくりに従事する。工房は主として家族単位で経営される。水簸施設、作業小屋、焼成窯で構成される工房が立ち並ぶエリアは畑の中に独立して立地し、集落とは隔離された環境にあり、陶工は10分ほどの距離に自宅を構えているという。典型的な工房は、ロクロ数基を備えた作業小屋 (6.5 × 9 m (58.5m<sup>2</sup>) を測る) に、2槽式水簸施設 (写真8)、最大径3 mほどの窯が付設され、総占有面積は90m<sup>2</sup>ほどになる。焼成は10日に1度の頻度で行ない、焼成時間は4時間である。窯は開放型であるが、頂部にいくに従ってすぼまっていく形態で、半開放とでもいふべき様相を呈する (写真10)。

サマンヌードでは、個々の工房はそれほど密集してはおらず、やや分散して存在する。インフォーマントによれば、陶工同士が親戚関係にあることは少ないといひ、このことがやや分散した工房配置を呈した理由であるかも知れない。

### (2) ザンカルーン

デルタ東部の町ザガジグのさらに東方に位置するザンカルーンには、5つの土器工房が軒を連ねている (写真3)。工房群は一般の住居とは区別されるものの、集落はすぐ近くに迫っており、隔離されているわけではない。それぞれの工房は家族・親族を成員とする。兄弟で作陶に励み、それぞれの妻が作業を補助するケースが多い。一方で、複数の工房が共同で作業を進めることはない。

取材した工房の作業小屋は4 × 10 mほどを測り、内部に2槽式の水簸施設が設けられ、さらに中庭を挟んで焼成窯1基が付帯している。中庭を含めた工房の総占有面積は90m<sup>2</sup>ほどになるであろう。窯はドーム状の天井を有する密閉型で (写真11)<sup>1)</sup>、2~3時間ほどの焼成を行なう。ここでは、特に大型の水甕 (ジール) の生産が中心となっている。

5つの工房はそれぞれ、3親等以内の親族で構成され、代々、ザンカルーンで作陶に従事してきたという。女性が作業を手伝うことが多いが、その度合いは家庭によってま

ちまちで、男性のみで運営される工房もあった<sup>2)</sup>。

### (3) ガウイーシュ

ガウイーシュはザンカルーンの近くに位置する。工房群は畑に囲まれた環境に立地し、居住域からは区別されている。インフォーマントによれば、40ほどの集団が土器づくりに従事するという(写真1)。個々の工房は家族単位で運営され、通年で土器づくりに従事する。頂部には径80cmほどの窯詰め口が設定されるものの、平らな天井が架けられ、密閉タイプの窯となっている(写真13, 14)。窯焚きは週1回行なわれ、6時間かけて土器を焼き上げるという。また現在でも、黒色土器の生産を行なっている。作業小屋(10×15m、150m<sup>2</sup>)に焼成窯や2槽式水簸施設が付帯し、工房の総敷地面積は170m<sup>2</sup>ほどになるであろう。このような工房(=生産単位)が40ほど密集している。

取材対象によれば、ガウイーシュの陶工は元来、イスラエル近くのアリーシュで土器づくりに従事していたが、イスラエル方面の政情不安を受けて、デルタ地帯に移ってきたという<sup>3)</sup>。その際、十分な用地を確保でき、粘土の取得も容易であるという理由で、現在の場所に工房を構えたという。なお、ガウイーシュの陶工は全てが親戚筋にあたるというが、工房同士で共同作業することはない。

### (4) マシ・ハーディー

ザンカルーン、ガウイーシュとともに、ザガジグ地区の土器生産を支えるマシ・ハーディーには、土器工房5軒ほどが存在する。取材した工房では、兄弟3名で作陶にあたり、そのため作業小屋には3基のロクロが設置されている。同工房では、夫人がたまに作業を補助し、学校に通う息子も授業が終わると手伝うが、工房間での共同作業はないという。

60m<sup>2</sup>ほどの作業小屋に、やや分散して2槽式の水簸施設及び窯が付帯するため、総占有面積は、100m<sup>2</sup>ほどになるであろう。窯は径80cmほどの開口部が設定された天井を有する密閉タイプで、そのフラットな天井のつくりはガウイーシュに類似している。焼成時間は6時間ほどで、黒色土器の生産も手掛けるという<sup>4)</sup>。

陶工の自宅は工房から20mほどの距離にある。工房は集落の縁辺部を占めるものの、民家が隣接している。マシ・ハーディーでは現在、水タバコの「灰置き」を主力製品に据えている。同じザガジグ地区でも、ザンカルーンが大型製品、ガウイーシュが中型製品、そしてマシ・ハーディーが小型製品といった分業が見受けられるのである。

### (5) ビルベイス

カイロの北東50km、デルタ地帯東縁に位置するビルベ

イスには、3軒の工房が土器生産を行なう。観察した事例では、工房所有者である陶工1名とその妻が主として生産にあたる<sup>5)</sup>。先代のときに、新たな仕事を求めて、ガウイーシュから移住してきたという。

工房は5×8mほどの作業小屋を中心に、別に、2槽式の水簸施設と密閉型の窯2基が設けられている。総占有面積は80m<sup>2</sup>ほどになる。2基の窯は、窯壁の一部を共有するかのようになり、隣接して設置されている。焼成は週1回、3時間ほどをかけて行われる。

工房は墓地の一角に立地し、集落から隔絶しているばかりでなく、ゴミなども多く散乱し、極めて劣悪な環境にある。これは警察の指導によるというが、当人はあまり気にならないという。

### (6) グレース

カイロの北西30km、アシュムーンの近くに位置するグレースには、150もの土器工房が存在するという(写真6)。個々の工房は家族単位で運営され、それぞれが作業小屋とそれに付随する焼成窯を持ち、作業小屋の中にやや小さな2槽式の水簸施設が設置される。作業小屋は4×10m、これに密閉タイプの窯が付属するため、占有面積は60m<sup>2</sup>ほどになるであろう。こうした工房が隣接しつつ立ち並んでおり、巨大な土器生産拠点形成している。工房群はまとまって存在するが、すぐ近くまで住居が迫っている。窯焚きは週1回行なわれ、4時間ほどかけて焼成するという。なお窯は窯壁が内傾するタイプで、窯詰め後、狭まった頂部をレンガでドーム状に覆う独特の形態を示す(写真12)。

取材したアリ・モヘッディーン氏の工房では、氏が中心となって作業を進めつつ、彼の妻がこれを補助する(写真5)。長男も授業が終わり次第、作業に合流するという。アリ氏の父親も同じグレースで土器工房を構えており、父親はアリ氏の兄(未婚)とともに土器をつくっている。アリ氏は結婚を機に独立し、新しい工房を構えたという。土器づくりは個々の工房が独立して実施するといいい、アリ氏は父親の工房とも共同作業をしない。

### (7) シャーイット・ターバーン

シャーイット・ターバーンはマディー近郊に位置し、主に石材加工業者が集まる工業地域を形成している。その奥まった一角で、3軒ほどの土器工房が操業を続けている。陶工はもともとフスタートで土器づくりを行っていた。しかし、行政指導によってフスタート工房が縮小・閉鎖されたことを受けて、10年ほど前に移転したという。職人たちの自宅はまだフスタートにあり、地下鉄やバスを乗り継いで、ここまで通勤して来るそうである。

取材した工房は3名の土器職人を抱え、助手2名とともに

に作陶を行なう。7 × 18 m (126m<sup>2</sup>) の作業小屋にはロクロ2基が設置されている。工房脇には2基の焼成窯と2槽式の水簸施設1基が設置され、工房全体の占有面積は180m<sup>2</sup>ほどになる。窯はドーム状の天井を有するタイプである。

#### (8) アブ・ラグワーン

カイロから35kmほど南下した街道沿いに土器販売の店舗があり、その裏に土器工房が設置されている。工房自体、孤立して存在し、周囲に一般の住居は見当たらない。ロクロ職人3名、助手3名の計6名が主に土器生産にあたっている。8 × 24 m (192m<sup>2</sup>) ほどの空間が作業場所として設定されるものの、特別な建物は建設されておらず、その一角に日除けの屋根架けをして、ロクロ2基が設置される(写真9)。同敷地内に、2槽式の水簸施設1基と窯2基が設置され、工房を成す。窯は1つが開放型、もう1つが密閉型(ドーム状の天井を有する)であり、前者では主にパン焼き用の陶板、後者では主に水甕を焼成するという。焼成は週1回、3時間ほどをかけて行なわれる。

工房責任者であるアブドゥル・ナーセル氏はもともと、土器生産地として名高い上エジプト・ケナの出身で、先々代あたりからアブ・ラグワーンに移り、土器工房を構えたという。ロクロ職人のうち1名はアイヤートから通勤している。

#### (9) アイヤート

アブ・ラグワーンからさらに10kmほど南下したナイル川沿いに、アイヤート工房は営まれている。一般の住居域からは隔離された環境に立地している。150m<sup>2</sup>ほどを占める敷地に、ロクロ3基、単槽式水簸施設3基がセットで設置され、3名の陶工にそれぞれ助手が付いて、土器づくりにあたる。3名の陶工のうち、2名は親戚関係にあるが、もう1名は血縁関係にないという。開放型の窯1基が伴い、3名の陶工に共用されている。2 × 6 mほどの小屋が敷地隅に立てられているが、ここで作業を行なうことはない。上述のアブ・ラグワーンの職人はこの工房から転出したという。

この工房は水甕生産に特化している。焼成は週1回、1時間半ほどをかけて実施される。

#### (10) ヘルフ

カイロから南下すること70km、ナイル川東岸に位置するヘルフの土器工房は、居住域の周縁部に立地する。ここでは、工房責任者である親子と住み込みのロクロ職人1名、助手1名の計4名で土器をつくる。住み込みの職人はフスタートで働いていた経歴を持つ。工房責任者にスカウトさ

れたといい、週末はフスタートの自宅で過ごす。

工房は住居スペースと一体化しており、100m<sup>2</sup>ほどの空間が土器成形のための空間となる。別に密閉型の窯2基と2槽式水簸施設が屋外に設けられ、トータル180m<sup>2</sup>ほどが土器製作にあてられている格好である。窯は2週間に1度ほど焚かれ、通常は3時間ほどの焼成である。ただし、土器を白色に焼き上げるためには、15時間の焼成時間が必要であるという。天井がドーム状を呈する窯はかつて、フスタートの職人を招いて築窯してもらったという。

#### (11) ナズラ (佐々木・齋藤 2002)

ファイユーム、カルーン湖の南方およそ10kmにあるナズラは、集落から通りを隔てた運河沿いに土器工房群が形成されている(写真2)。開放型の焼成窯16基が設置され、それぞれに2~3軒の作業小屋と単槽式水簸施設(写真7)が付帯している。土器生産は家族・親族で構成され、全体で16ほどの工房が生産にあたり<sup>6)</sup>、すぐ脇の村に自宅を構えている。ロクロに加え、叩き成形を伴う点に特徴があり、両者は別々の陶工により成形される。

作業小屋は小さなものが多く、2 × 3 mほどのものが中心である。ここに単槽式の水簸施設と開放型の土器焼成窯が加わる。空間領域が明確ではないためあくまで目安となるが、1つの生産単位が60m<sup>2</sup>ほどを占有している。窯焚きは、週1回ほどの頻度で行なわれ、3時間ほどの時間をかけるという。

#### (12) ザラタ

ベニ・スエフ郊外に位置するザラタの工房は、ベニ・スエフからファイユームへと向かう街道沿いに営まれている。工房は一般住居の軒先を借りる形で存在し(写真4)、居住域に同化しつつ、土器生産を行なう。ここでは、3軒ほどの工房が土器製作に従事する。取材した2つの工房は家族単位で生産にあたり、1つの焼成窯を共用している。工房は一般の住居の軒先を利用して設置され、2 × 10 mほどの空間に、単槽式の水簸施設、叩き成形のための叩き穴、ロクロなどが設けられ、やや離れて開放型の窯が設置されている。土器置き場を含む工房の総占有面積は、概ね50m<sup>2</sup>と算出される。

この工房では叩き成形が特徴となっている。男性が叩き作業を行なうこともあるが、その場合には助手格の若い男性に限られており、叩き成形は主として女性の仕事になっている(写真16)。壺の頸部分はロクロでつけていくが、これは親方格の男性の仕事になっており、一定の性別分業が成立していることが窺われる。ザラタではボクラと呼ばれる球胴形の丸壺が主力製品となっている。

## (13) ヒガーザ

ルクソールから30kmほど北上したナイル沿いに、ヒガーザは位置する。取材した工房は家族で経営され、10m四方の作業スペースに適宜、屋根架けをし、そこにロクロ、単槽式の水簸施設などが設置される。作業スペースの外には、開放型の窯1基が付帯する。総敷地面積としては120m<sup>2</sup>ほどになると思われる。同様の土器工房が、ヒガーザには5軒あるという。集落から隔絶した立地ではないが、その縁辺部に位置する。焼成は1～2週間に1度行なわれ、焼成時間は1時間半ほどである。

ヒガーザにおいて特に注目されるのは、男女による分業体制が確立していることである。製作工程のほとんどは、工房主である主人が行なうが、成形を済ませた土器に対して、把手を付加したり底部を補強したりする作業は妻の役割となっている(写真17)。また、成形の済んだ土器を数日乾燥させた後、丸石によって研磨を施す。このミガキにより、作品は独特の光沢を帯びることとなる。

## (14) メダムード

ルクソール郊外に位置するメダムード工房は、居住域とは隔絶した環境にある。6×9mほどの作業小屋が設けられ、複数の職人が作陶に励んでいる。この工房では作業の分担が明確で、ロクロ職人2名、透かし細工職人1名、粘土職人1名、窯焚き職人1名の計5名で生産にあたる。窯場の経営者は別にいて、ルクソール市内で土器販売店を営んでいる。職人のうち3名はフスタートから、1名はソハーグから、それぞれ工房経営者が招聘したという。経営者が土器製作に関わることはないようだ。

30×30m(900m<sup>2</sup>)ほどの敷地に、作業小屋、2槽式の水簸施設、焼成窯、職人のための居住スペースなどがゆったりと配置される。遠隔地ではあるが、敷地内には水路も引かれ、快適な空間を形成している。窯は天井を有する密閉タイプで、焼成は1～2週間に1度行なわれ、焼成時間は10～12時間と長い。なお、現在の窯はシャイット・ターバンから職人を招いて築窯したといい、頂部がドーム状につくられたタイプである。

## (15) ファクターラ

ルクソール地区にはかつて、複数の土器工房が知られ、様々な形態の土器生産が認められたが(Brissaud 1982)、2006年夏の時点で確認された土器工房は1軒のみであった。しかも残されたファクターラの工房でも、現在では殆ど土器づくりを行なっておらず、資材運搬などの各種雑用によって生計を立てている。ルクソール地区で流通している土器の多くは、上述のヒガーザや、一大土器生産地として知られるケナで製作されたものである。今なおさかんに土

器をつくるこれら工房によって、ルクソール地区の在地生産はほぼ廃業に追い込まれている。

取材対象の工房は住宅地に立地し、家屋内の6×8mほどの空間(48m<sup>2</sup>)を土器工房にあてており、家族経営の工房となっている。特に屋根を架けることもなく、オープン・スペースでの作業となる。ここに、ロクロ、単槽式の水簸施設、焼成窯が1基ずつ設置される。焼成はかつて、週1回、1時間半ほどをかけて行なわれていたという。

## (16) シーワ・オアシス(齋藤ほか2004)

カイロの南西およそ600kmに位置するシーワ・オアシスには、女性による世帯内生産に依拠する土器づくりが伝えられている。各家庭の女性は、通年・不定期に土器をつくる。土器は手捏ねで成形され、野焼きによって焼成される。ロクロや窯を設置しないため、明瞭な工房を形成することがなく、作業は家庭内のスペースを適宜活用して行なう。ナツメヤシの葉柄を用いての野焼きは、被覆材を伴うことのない、開放的な野焼きであり、30分ほどで完了する。

シーワ・オアシスの土器づくりは、世帯内生産の様相をとどめた稀有な事例であり、ナイル川流域にはもはや残されていない土器生産様式として注目される。独特の土器文化を現出させながらも、土器製作に関わる考古学的痕跡をほぼ完全に残さない。

## (17) ダクラ・オアシス(齋藤ほか2003)

ルクソールの西方300km、西方砂漠に位置するダクラ・オアシスでは、土器生産の伝統が残されている。街道沿いにある工房には一般の住居が隣接しており、居住域の縁辺部を占める立地となっている。

5×12mほどの作業小屋には、計8基のロクロが設置され、そこに10名前後の陶工が集まって土器をつくるという。陶工同士が血縁関係にあることは少ないようであるが、作業助手は近親者が務めることが多い。作業小屋の前には3つの単槽式水簸施設が設置され、さらに11基もの開放型窯が設けられている。工房全体としては25×40m(1000m<sup>2</sup>)ほどのスペースを占有する。

焼成は1時間をかけて、2週間に1度ほどの頻度で行なわれる。土器生産は春から夏を中心に実施され、秋冬期は土器づくりを行なわずに、農業などで生計を立てるといふ。こうした季節的な生産スタイルが伝統的であるか否かについては、判断が難しい。

なお取材に応じてくれたケナウイ氏はその名の示す通り、上エジプト・ケナの出身で、5代ほど前にダクラ・オアシスに移住してきたという。



写真1 土器工房 (ガウイーシュ)



写真2 土器工房遠景 (ナズラ)



写真3 土器工房 (ザンカルーン)

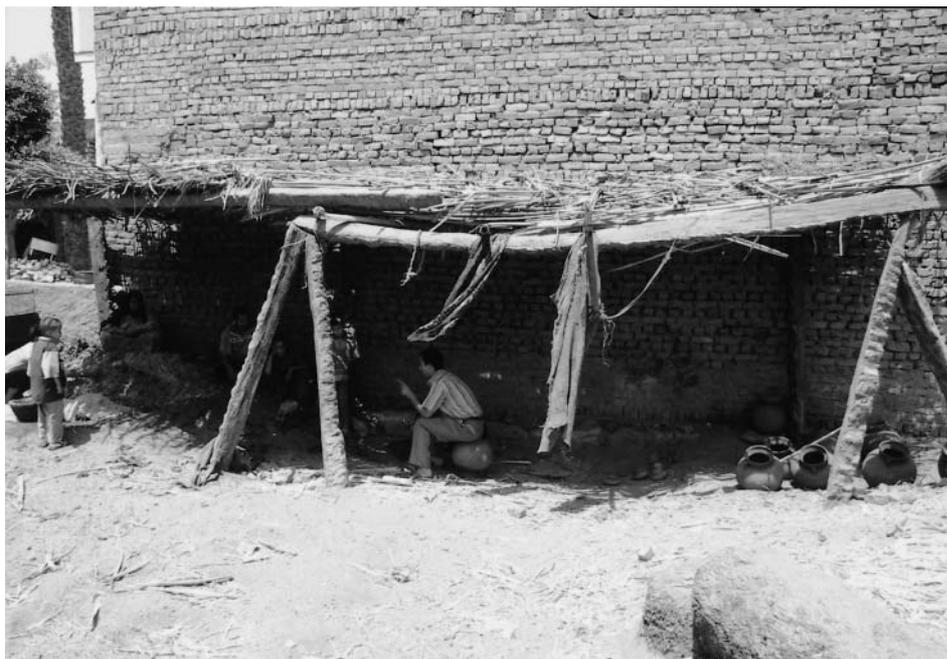


写真4 土器工房（ザラタ）

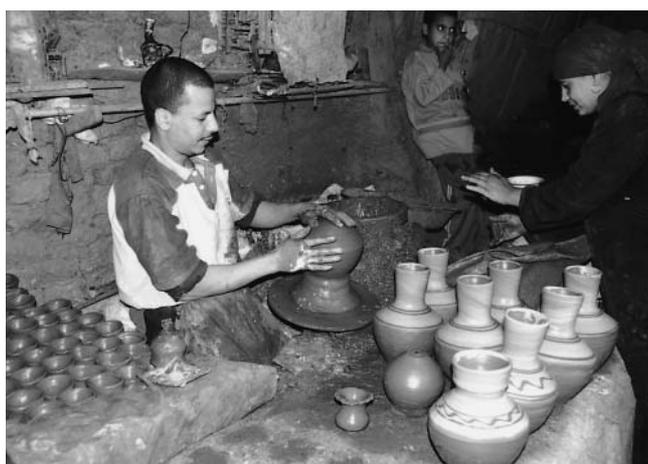


写真5 成形作業（グレース）



写真6 工房の様子（グレース）



写真7 単槽式水簸施設（ナズラ）



写真8 2槽式水簸施設（サマンヌード）



写真9 開放窯 (アイヤート)



写真10 半開放型窯 (サマンヌード)

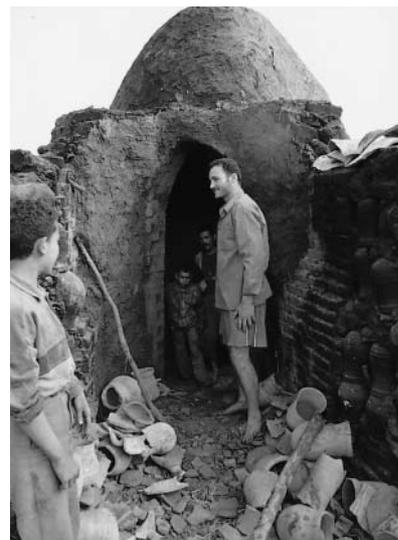


写真11 密閉窯 (ザンカルーン)

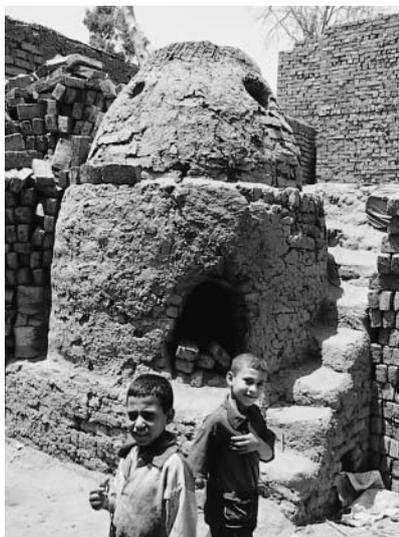


写真12 密閉窯 (グレース)



写真13 密閉窯 (ガウイーシュ)



写真14 密閉窯頂部開口部 (ガウイーシュ)



写真15 ロクロ成形 (アブ・ラグワーン)



写真16 叩き成形 (ザラタ)



写真17 成形補助 (ヒガーザ)

### 3. 民族誌からみた土器生産様式

#### (1) 土器生産様式の分類

冒頭でも触れたように、エジプト考古学における土器生産様式のモデルが既に提示されているが、それは前項において概観した民族誌とどの程度合致しているのか。まずは、古代エジプトをフィールドとする土器研究者が思い描く土器生産様式を確認しておくこととする。古代エジプトでは以下の如き生産様式が存在したと考えられている (Bourriau et al. 2000: 141)。

##### ① 世帯内生産 (household-based or 'domestic' production)

世帯における需要に応じて生産し、専用の製陶具を使うことがない。陶工は専門家ではなく、しばしば女性が土器製作を行なう。

##### ② 世帯内産業 (household industry)

世帯内の生産であるが、作品を商品として流通させることを視野に入れている。陶工は基本的な製陶具を用いるが、土器製作だけで生計を立てているわけではない。

##### ③ 個人工房における生産 (individual workshops)

フル・タイムの生産ではない場合もあるが、陶工は土器製作だけで生計を立てている。しばしば男性がつくり手である。工房は小さく、独立したものである。しかし、専用の製陶具を用い、工房は機能的である。製品は在地で消費される。

##### ④ 集中工房における生産 (nucleated workshops)

個人工房が集中し、複合的な工房を形成する。陶工は土器製作だけで生計を立てる。高度な技術を駆使し、高品質の土器を生産する。

##### ⑤ 従属専門による生産 ('attached' specialist producers)

生産と需要を市場操作できる有力者のために行なわれる生産。ここには国家やエリートによる統制生産も含まれる。工房の製品は交易の対象となり得る<sup>7)</sup>。

この分類を民族誌にそのまま敷衍させるには無理があるようだ。すなわち、たとえばシーワ・オアシスの事例は女性による生産であり、製陶具が利用されない点で、「世帯内生産」に分類し得る (齋藤ほか 2004: 86-87)。しかし、製品は土産物として僅かながら流通しており、「世帯内産業」としての性質も備えている。土器以外の生活雑器が主流を占める現代エジプトにおいて、純粋に「世帯内生産」に分類される事例を求めることは難しく、「世帯内産業」との線引きは現状では不可能である<sup>8)</sup>。本稿では両者をまとめて、(a) 世帯内生産と位置付けることとしたい。

「個人工房」については、ファクラーの事例をこれにあ

てはめてよいであろう。この事例を (b) 個人工房に分類したい。

いわゆる「集中工房」については、「個人工房」の垣根が取り払われ、血縁関係にない複数の陶工が一部施設を共同で使用する土器工房がいくつかここに分類される。ダクラ・オアシスの事例が典型となるであろう。しかし、「個人工房」が集まりつつも、個々の工房が独立し、個別に生産にあたる事例がデルタを中心に多く認められた。主として家族で営まれるこれらの工房では、女性の作業参加も多く認められることから、「集中工房」とは明確に区別される。すなわち、既存の分類における「集中工房」については、細分して考えることが適当である。家族経営を主体とする「個人工房」が独立したまま集まった (c) 集合工房と、家族・親族の関係にない複数の職人が共同で働く (d) 共同工房に分けて考えたい<sup>9)</sup>。

「従属専門による生産」については、土器販売店を経営するオーナーが職人を雇って運営するメダムードの事例がここに含まれるであろう。これを (e) 従属専門生産の事例と位置付けておく。

以上を踏まえ、民族誌にもとづく新しい類型を提示したい。

#### (a) 世帯内生産 (Domestic production or industry)

世帯内における土器生産で、特別に工房を構えない。土器製作は女性が行なう。成形は手捏ね、焼成は開放型野焼きによって行ない、土器製作の痕跡をほとんど残さない。

#### (b) 個人工房生産 (Individual workshop)

家屋の中に工房施設を構えるため、工房は住居域内に不可分に存在することになる。工房には水簸施設、ロクロ、焼成窯が設置され、小規模ながらも機能的な工房を呈している。土器製作は男性が中心となっていくが、女性が一部の作業工程を担ったり、作業を補助することが多い。

#### (c) 集合工房生産 (Assembled workshops)

独立した個人工房が複数集まって、土器生産拠点形成する。工房は住居とは別に構えられる。個々の工房は 50 ~ 100m<sup>2</sup> ほどの規模を有し、それぞれが個別に工房と窯、水簸施設を備える。各工房は主として家族単位で経営され、概して主人である男性の陶工が土器生産にあたり、その妻や子供が作業を補助するケースが多い。しかし一方で、たとえ親族関係にあっても、複数の工房が共同で作業を行なうことはない。

#### (d) 共同工房生産 (Corporative workshop)

共同工房では、集合工房のように個々の工房が独立しつつ集まっているのではなく、血縁関係にない複数の陶工が作業小屋や窯などを共同で使用する。そのため工房は、やや広い占有面積 (150 ~ 190m<sup>2</sup>) を測る。複数の男性の陶

工が集まるため、複数のロクロを備えたやや規模の大きな作業小屋を中心に、水簸施設や窯がやや分散して配置される。窯は複数付帯することがある。土器生産は男性によって担われ、工房に女性の姿は認められない<sup>10)</sup>。

(e) 従属専門生産 ('attached' specialist producers)

現代エジプトの窯業において、パトロンによる統制生産を見出すことは難しい。唯一、従属専門に分類し得るのは、経営者が全く別個に存在するメダムード工房である。この工房は、土器販売業を営むオーナーがエジプト各地から陶工を集めて土器を生産しており、特に工程による分業体制が確立している点で、専門性の高さが窺われる。メダムード工房では陶工は男性であり、共同生活を営みつつ、大規模な土器生産に従事する。なお従属専門は、統制生産の有無によって他の生産様式と区別されるため、工房の形態のみからそれと認定することは難しいと想像される。

(2) 土器生産様式の検討

エジプトの土器づくり民族誌に立脚し、上記のような生産様式に関する類型が想定された。以下、いくつかの観点から、この類型について検討を加えたい(表1)。

地域性について

土器文化が限定的にしか残存しない現代のエジプトにおいて、世帯内生産や個人工房の事例はごく僅かに認められるに過ぎない。おそらく、世帯内生産や個人工房における土器生産は存続が難しく、より大規模な集合工房や共同工房に飲み込まれてしまったのであろう。一方で、個人工房が集まりつつ生産拠点となる集合工房はデルタを中心に認められる。デルタの事例は全て集合工房となっており、共同工房が優勢なナイル河谷の状況とは大きく異なってい

る。サマンヌード、ガウィーシュ、グレースといった生産地は多くの個人工房が集まって膨大な量の土器を産出しつつも、個々の工房は全く別個に作業を進めるため、密集する理由を生産効率に求めることができない。この点は、土器工芸の専門化を考える上で示唆に富むであろう<sup>11)</sup>。

既に指摘したことがあるが(齋藤 2007: 表1)、デルタでは2槽式水槽により水簸し、密閉型窯で焼成するのに対し、ナイル河谷では水簸施設は単槽、窯は開放型である事例が一般的である。このような技術体系の違いに、生産様式を重ね合わせてみると、上下エジプトの地域性はより一層明確となる。デルタとナイル河谷のそれぞれの地域伝統の違いが、現存の民族誌にも反映されていると考えるのは穿ち過ぎであろうか(齋藤 2007: 41)。

なお、既に紹介したように現代エジプトの民族誌では陶工は活発に移動しており、そうした状況は古くからあったと考えられる。にも関わらず、地域性が今なお観取されたことは極めて興味深いであろう。陶工の移動があっても、地域伝統の特色は決して失われなかったと評されるのである。

性別分業について

一般的に、自家消費される土器の製作者は女性であるとされ(都出 1989: 40-41)、交易品としての土器は男性がつくることが多い(佐原 2008: 25)。さらに土器製作における性別分業として、手捏ね成形の場合は女性が土器をつくり、ロクロ成形になると男性の仕事になるという見解もある(佐原 2008: 24-25, 30)。専門化が進むにつれ、男性による土器づくりが主流になっていったと考えるこうした前提に立つとき(cf. 小林 1993b: 34-35)、エジプトの民族誌はその好例となる。すなわち、世帯内生産の事例では女性

表1 エジプトの土器づくり民族誌一覧

番号	土器工房	地域	生産様式	工房数	つくり手の性	占有面積	立地	水簸施設	窯構造
18	シーワ・オアシス	オアシス	(a)世帯内生産	-	女性	-	集落内	なし	なし
15	ファクラー	ナイル河谷	(b)個人工房	-	男性+女性	48m <sup>2</sup>	集落内	単槽式	開放型
1	サマンヌード	デルタ	(c)集合工房	40	男性(+女性)	90m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	半開放
2	ザンカルーン	デルタ	(c)集合工房	5	男性(+女性)	90m <sup>2</sup>	集落縁	2槽式	密閉型
3	ガウィーシュ	デルタ	(c)集合工房	40	男性(+女性)	170m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	密閉型
4	マシ・ハーディー	デルタ	(c)集合工房	5	男性(+女性)	100m <sup>2</sup>	集落縁	2槽式	密閉型
5	ビルバイス	デルタ	(c)集合工房	3	男性(+女性)	80m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	密閉型
6	グレース	デルタ	(c)集合工房	150	男性(+女性)	60m <sup>2</sup>	集落縁	2槽式	密閉型
11	ナズラ	ファイユーム	(c)集合工房	30	男性	60m <sup>2</sup>	集落縁	単槽式	開放型
12	ザラタ	ファイユーム	(c)集合工房	3	男性+女性	50m <sup>2</sup>	集落内	単槽式	開放型
13	ヒガーザ	ナイル河谷	(c)集合工房	5	男性+女性	120m <sup>2</sup>	集落縁	単槽式	開放型
7	シャーイット・ターバーン	ナイル河谷	(d)共同工房	3	男性	180m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	密閉型
9	アイヤート	ナイル河谷	(d)共同工房	1	男性	150m <sup>2</sup>	集落外	単槽式	開放型
8	アブ・ラグワーン	ナイル河谷	(d)共同工房	1	男性	192m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	密閉型
10	ヘルフ	ナイル河谷	(d)共同工房	1	男性	180m <sup>2</sup>	集落縁	2槽式	密閉型
17	ダクラ・オアシス	オアシス	(d)共同工房	1	男性	1000m <sup>2</sup>	集落縁	単槽式	開放型
14	メダムード	ナイル河谷	(e)従属専門	1	男性	900m <sup>2</sup>	集落外	2槽式	密閉型

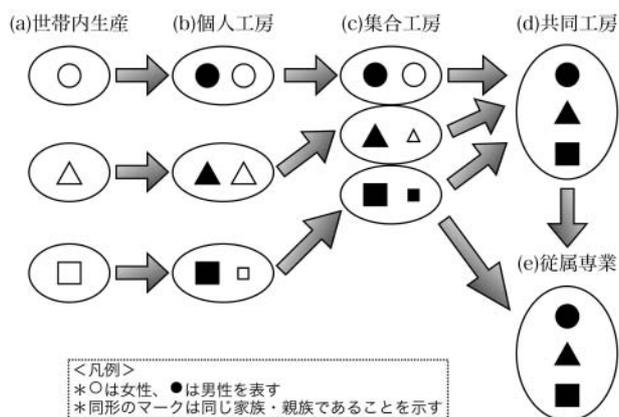


図2 土器生産様式変容のモデル

がつくり手であったが<sup>12)</sup>、つづく個人工房の段階で早くも男性が中心となる。ただし、ロクロ以外の成形や補助的な作業など、土器製作において女性が一定の役割を担う場合が多い。これが集合工房になると男性の役割はさらに支配的となり、共同工房に至ると女性の姿を見かけることさえなくなってくる。エジプトの土器づくり民族誌においては、世帯内生産から個人工房、集合工房、共同工房へと変容する過程で、土器製作者が女性から男性へと徐々に推移していく状況を具体的に辿ることができるのである。民族誌から想定される各生産様式は、土器生産発展の諸段階に相当すると見做すことができるだろう(図2)。

もちろん、旧来の生産様式が新しいタイプに完全に置き換わるわけではなく、複数の生産様式が並列的に共存し得たことは想像に難くない。しかしながら、民族誌の検討によって浮かび上がってきた土器生産様式の配列は、製作者が女性から男性へと段階的に変化したことを示し得るものであり、技術発展の方向性と矛盾していないというのが筆者の考えである。本稿において提示した5つの生産様式の配列を土器製作技術発展のモデルとして捉えたい。

なお既述の通り、先行研究で示された生産様式のモデルにおいては、土器製作における女性と男性の区別が曖昧であり、個人工房の段階以降、概ね男性が土器をつくるという言及にとどまっていた(Bourriau et al. 2000: 141)。「集中工房」として一括されていた生産様式を集合工房と共同工房に分けたことで、女性から男性への段階的な変遷が浮き彫りにされたのである<sup>13)</sup>。

#### 占有面積について

個人工房では占有面積は50m<sup>2</sup>となった。多くの工房が集まる集合工房になると、個々の工房面積が60～100m<sup>2</sup>(例外はガウィーシュの170m<sup>2</sup>)と算出された。さらに共同工房では、150～190m<sup>2</sup>となった。生産様式によって工房の規模に違いがあることは明確であり、生産様式の変容

に伴って工房が大型化する傾向を指摘できるであろう。

ここで、本稿で扱ったもの以外の民族事例をいくつか紹介しておきたい。上エジプト、ディール・マウスでは工房の占有面積は64m<sup>2</sup>である(Nicholson 1995b: Figure 9.1)。個人工房として典型的な占有面積を呈した。一方で、ルクソール地区ではいくつかの土器工房が報告されている。コム・ラムラでは200m<sup>2</sup>の工房と600m<sup>2</sup>の工房が複合的に1つの工房を形成していた(Brissaud 1982: Fig. 3)。これを共同工房と認定した場合、トータルで800m<sup>2</sup>を測る事例となる。本稿で扱った民族誌事例の中ではダクラ・オアシスに匹敵するであろう。一方で、ターリフでは個人工房が認められたが、その占有面積は144m<sup>2</sup>(12 m四方)を測った(Brissaud 1982: Fig. 11)。より大規模な個人工房として注目される。ディール・アル＝ガルビでは、1000m<sup>2</sup>(500m<sup>2</sup>×2)の土器工房が知られる(Nicholson and Patterson 1985: Figure 3)。1600m<sup>2</sup>(40 m四方)を測る工房が報告されるフスタート(Kooij and Wendrich 2002: 147, Figure 13-1)とあわせ、より大規模な共同工房の事例として注目される。

#### 立地について

民族誌にみられる工房立地は、土器製作のあり方そのものに影響されるほか、現代的・社会的制約(行政指導など)を受けていると考えられる。さまざまな要因が複雑に絡み合って、立地を決定しているとみるべきである。考察には注意が必要であるが、それでも、概ねの傾向を観取することは不可能ではない。世帯内生産や個人工房において、工房は一般の住居と不可分に、集落内に立地している。集合工房では、集落の縁辺部に立地する事例を中心に、居住域とは隔絶した場所を占める事例も見受けられる。共同工房になると、引き続き集落縁辺部に位置する例があるものの、多くは集落から隔絶した立地を示すようになる。すなわち、生産様式が変容するにつれ、工房の立地は集落内からその縁辺部、さらには集落の外へと移動していくという傾向が観取されるのである。

なお古代メソポタミアでは、ウバイド期において集落・居住空間内に位置した土器工房が、ウルク期になると集落周縁へと移動するという(小泉 2000: 26-27)。土器生産の発展に伴って工房立地が居住エリアから離れていくという傾向は、エジプト民族誌とも矛盾しないであろう。

#### 4. 民族誌モデルの考古学的検討

前項までに試みた民族誌の確認作業によって、土器生産様式に関する新しい類型が提示された。次に問題となるのは、この類型が考古学的にも敷衍させることができるか否かである。本項において、土器工房に関する考古学的情報

表2 考古資料一覧

遺跡	時代	生産様式	占有面積	立地	図版番号	文献
ダクラ・オアシス	古王国時代	個人工房	50m <sup>2</sup>	-	図3-1	Hope 1980
ダクラ・オアシス	ローマ時代	共同工房	240m <sup>2</sup>	集落縁	図3-2	Hope 1980
アイン・アシル	古王国時代～第一中間期	共同工房	180m <sup>2</sup>	集落縁～外	図3-3	Soukiassian et al. 1990
アマルナP47.20	新王国時代	個人工房／従属專業	50m <sup>2</sup>	集落内	図3-4	Nicholson 1995a
北シナイ, Site A-345	新王国時代	集合工房	60m <sup>2</sup> (×2?)	集落縁	図3-5	Oren 1987
エズベット・ヘルミ	新王国時代?	個人工房／従属專業	60m <sup>2</sup>	(神殿域?)	図4-1	Bietak et al. 1994
アブ・シール、ケントカウエス	古王国時代	従属專業	50m <sup>2</sup>	(神殿域)	図4-2	Verner 1992
ダハシュール、赤ピラミッド	古王国時代	従属專業	600m <sup>2</sup>	(神殿域)	図4-3	Stadelmann 1983

を整理し、検討を加えたい。

なお、土器生産様式を考えると、性別分業や占有面積、工房立地などが有効な視点となることは既に確認された通りである。このうち、性別分業については、考古資料からはアプローチすることが極めて困難であり、検討項目からは割愛せざるを得なかった。一方で占有面積は、既存の考古学的情報からも復原することができ、民族考古学的な比較検討に耐え得るデータと見做すことができる。また、工房立地については、情報は必ずしも完備されておらず、副次的に参照することとなったことを明記しておく。

ところでエジプト考古学において、土器焼成窯と目される遺構の検出例は少なくない(齋藤 1998)。ただし、焼成窯が検出されていても工房全体の発掘が済んでいない事例が多く、工房の全体像が明らかな報告例は限定されてしまう。それでも、いくつかの事例では工房の占有面積を算出することができた。以下、占有面積を判定できた8つの事例を検討したい(表2)<sup>14)</sup>。

ダクラ・オアシスでは2つの時期の土器工房が検出され、そのうちの1つは古王国時代に比定された(Hope 1980: Plates XXVI)。工房の境界は不明瞭であるが、占有面積は50m<sup>2</sup>ほどと推測される(図3-1)。民族誌における個人工房レベルの占有面積である。工房の立地については、これを判断するデータを欠いている。

ローマ時代に比定される事例は、15 × 16 mほどの建造物内に4基の窯が確認された(Hope 1980: Plates XXVII)。建物自体が土器工房として機能したと考えられ、遺跡端部に立地するという(Hope 1980: 307)。工房としての占有面積は210m<sup>2</sup>と算出される(図3-2)。この事例は、いくつかの部屋を共有するその構成から、共同工房と判断されるであろう。210m<sup>2</sup>という占有面積は概ね、民族事例に重ねることができる。と考える。

同じダクラ・オアシスのアイン・アシルでは、複数の窯を共有する共同工房が検出された(Soukiassian et al. 1990: Fig.10)。この工房は集落周壁の外部に立地し(Bourriau et al. 2000: 138)、古王国時代から第一中間にかけて操業したとされる。時期によって規模に変動があるが、

最大で180m<sup>2</sup>(10 × 18 m)の面積を占めた(図3-3)<sup>15)</sup>。民族事例における共同工房の占有面積(150 ~ 190m<sup>2</sup>)に合致する。

テル・アル＝アマルナでは、中央市街P47.20において建物内に焼成窯が検出されている(Nicholson 1995a: Figure 7.1)<sup>16)</sup>。必ずしも状況は明瞭ではないが、部屋の構成をみる限り、占有面積は50m<sup>2</sup>ほどと算出される(図3-4)。個人工房規模の生産が想定される一方で、大きな邸宅の一角を占めるその立地からは、エリートによる従属專業であった可能性も示唆されるであろう。

北シナイ、Site A-345では、行政に関わったとされる建造物の裏手に、工房が立ち並ぶ一角があり、そこに土器工房が認められた(Oren 1987: 84, 99)<sup>17)</sup>。集落周縁という立地を想定するのが妥当であろう。工房の占有面積は不明瞭であるが、60m<sup>2</sup>(6 × 10 m)ほどの面積を占めたと想定される(図3-5)。近く(図3-5右端)にはもう1基の窯が認められるため、個人工房がやや分散して集まった集合工房を形成していた可能性が高い<sup>18)</sup>。60m<sup>2</sup>という占有面積は、集合工房の1つの生産単位として、民族誌に類例を求めることができる。

エズベット・ヘルミでは、家屋と家屋の間のスペースを利用して営まれた土器工房が検出された(Bietak et al. 1994: Abb.9)。60m<sup>2</sup>ほどの土器工房(図4-1)は、その構成からも個人工房として機能していたと考えられ、民族誌に比較データを求めることができる<sup>19)</sup>。

ピラミッドに付随する工房が2例認められるが、それぞれの占有面積は50m<sup>2</sup>(アブ・シール、ケントカウエス、Verner 1992: Fig.1)と600m<sup>2</sup>(ダハシュール、赤ピラミッド、Stadelmann 1983: Abb.2)を測り、大きな隔たりがあった。アブ・シールの土器工房(図4-2)について、ピラミッド葬祭殿という特異な立地から、一定の統制を受けた従属專業生産であったと想像される。一方で、その占有面積は小さく、個人工房レベルに留まっている。この事例は、従属專業生産が個人工房規模の工房によって行なわれ得たことを示唆している。

同じくピラミッド葬祭殿で検出されたダハシュールの事例は、600m<sup>2</sup>の占有面積を呈し、ここで示した事例の中で

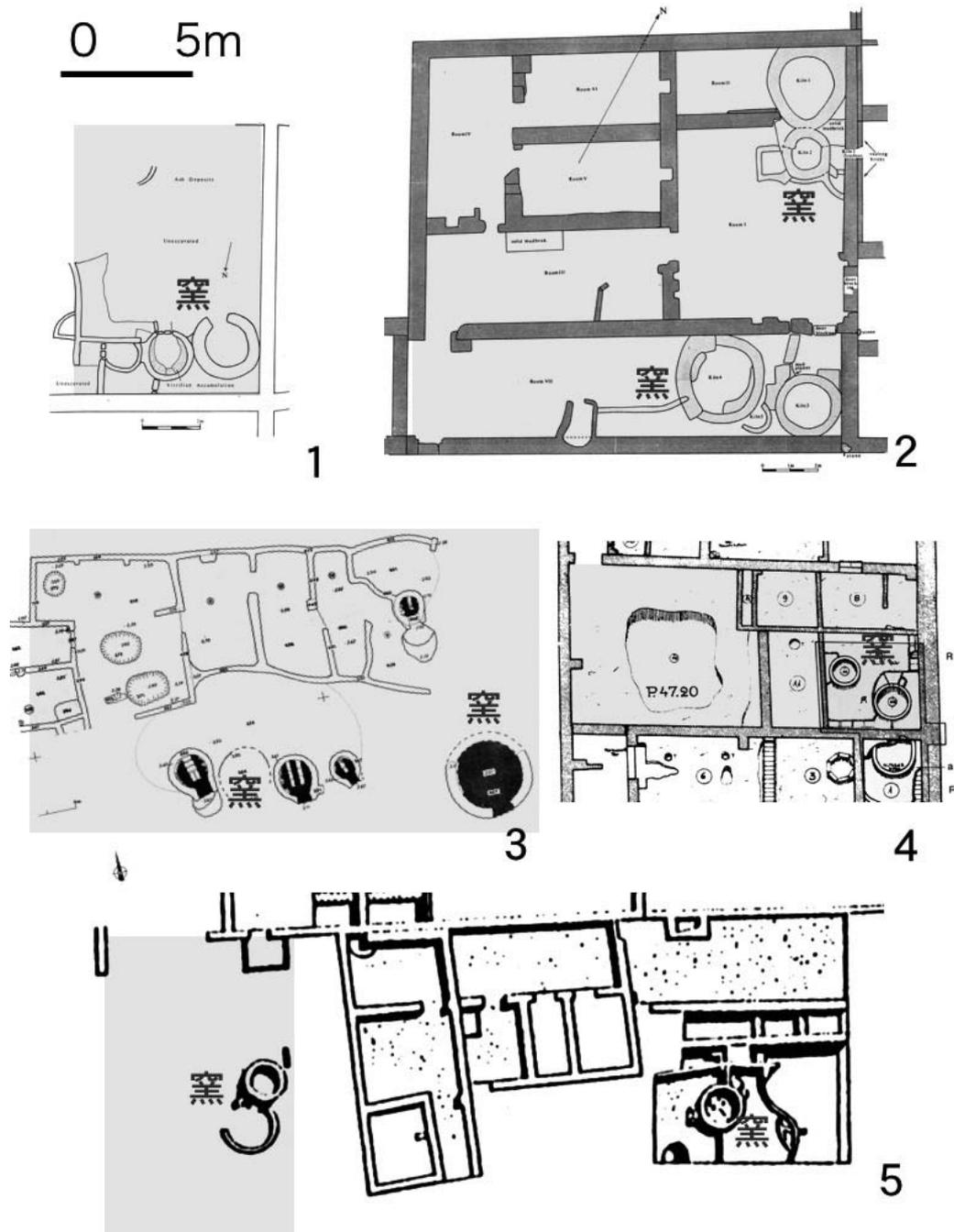


図3 考古資料(1)

最大規模となる(図4-3)。3基の窯が設置されていることと併せて、大規模な土器生産が行なわれていたことは想像に難くない。この工房はその独特の立地から、従属専門の事例と想定することが妥当である。このことは、民族誌において唯一従属専門に分類されたメダムードの事例(900m<sup>2</sup>)に照らしても、占有面積の点で矛盾しないであろう。

以上、主として土器工房の占有面積について、考古学的情報を整理してみた。結果、50～60m<sup>2</sup>、200m<sup>2</sup>前後、

600m<sup>2</sup>という異なる占有面積を有する工房が認められ、民族誌における状況と類似した。特に前二者については、部屋の構成や立地を踏まえても、個人工房と共同工房にそれぞれ分類することが可能である。すなわち、考古資料と民族誌の間には一定の整合性を見出すことができたのである。

一方で、矛盾もある。集合工房について、デルタ民族誌のように多数の工房が集まった事例は、今のところ考古学的には確認できていない。北シナイ Site A-345の事例に

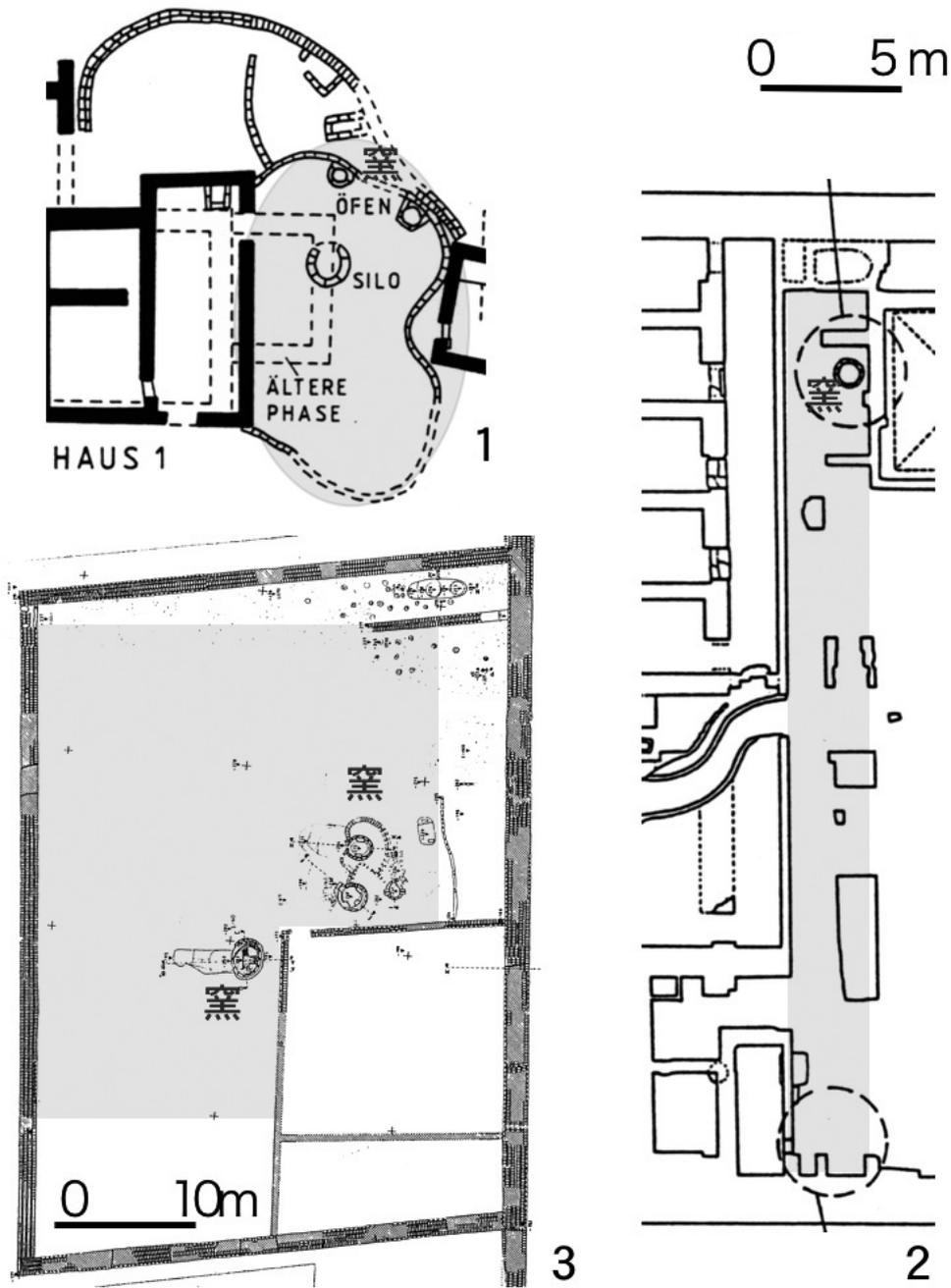


図4 考古資料(2)

みられるように、集合工房が存在したことは確かだが、民族誌で確認されるような大規模なもの存否については、現状では結論を保留せざるを得ない<sup>20)</sup>。

また、従属専業生産が想定される事例は大小様々な占有面積を呈しており、注意が必要である。従属専業については、個人工房規模の工房によって行なわれ得たことが既に指摘されているが(Bourriau et al. 2000: 141)、本項の検討はこれを支持した。民族事例が不足しているため判断が難しいが、従属専業生産における工房の規模は一定しないと見做すのが妥当であろう。様々な制約にうまく適応しつ

つ、従属専業が成立したとみるべきである。

工房立地については、考古学的情報から有益なデータ形成をすることが困難な状況にあり、軽率な議論は慎むべきであろう。しかし、小規模の工房(アマルナ P47. 20)が居住地と不可分に存在し、集合工房(北シナイ Site A-345)や共同工房(ダクラ・オアシス(ローマ時代)やアイン・アシル)となると居住区周縁部に立地した事実を見逃すべきではない。考古資料における土器工房の占有面積と立地はある程度関連した可能性は示し得たであろう。

## 5. 結語

以下、本稿における検討の結果をまとめたい。

1) エジプトの民族誌を概観すると、(a) 世帯内生産、(b) 個人工房生産、(c) 集合工房生産、(d) 共同工房生産、(e) 従属専門生産、という5つの生産様式を見出すことができる。

2) これらの土器生産様式を並べてみると、土器製作者が女性から男女の共同作業、さらには男性へと徐々に変わっていく様子が確認できた。よって、(a) 世帯内生産から(e) 従属専門生産の各生産様式は、土器生産様式の発展段階を示していると推測することができる。そしてこのことは、工房の立地や規模といった観点からも裏付けられるであろう。

3) 工房の立地については、世帯内・個人工房から集合工房、共同工房へと変容するにつれ、居住域内から縁辺部、さらには外部へと移っていく傾向が認められた。

4) 民族誌にみられる土器工房の占有面積は、個人工房で50m<sup>2</sup>前後、集合工房で50～100m<sup>2</sup>、共同工房では150～200m<sup>2</sup>ほどになっている。生産様式の変容に歩調を合わせるかのように、工房の占有面積は大きくなる傾向を示している。ただし、考古資料を参照する限り、従属専門については別個に考えるべきである。

5) 工房の占有面積や立地、形態といった観点から、考古資料と民族誌を見比べると、共通点は少なくない。特に考古資料における土器工房の占有面積はいくつかに分類され、民族誌における状況と符合した。したがって、考古学的に検出された工房の占有面積は、そこで行なわれた土器生産の様式や専門化の度合いを推し量る上でメルクマルとなり得る。

現代社会が抱える様々な問題に規制を受けつつ存在する民族誌を、古代に敷衍させるには十分な配慮が必要であることはいうまでもない。加えて、民族誌によって示された各生産様式は複雑に共存した可能性が高く、その状況を正確に把握することは至難の業である。しかしながら、既存の考古学的データを民族誌に照らして考えることはあながちの外れではないというのが、本稿におけるささやかな結論である。

そして何よりも、土器づくりで生計を立てる陶工たちは遅く生きており、工房は活気に溢れている。そのような現実に目を背けては、古代土器生産の実態に迫ることは覚束ないのではあるまいか。民族誌からの視点を活かしつつ、土器研究を継続したいと考えている。

## 謝辞

本稿で扱った土器づくり民族誌のデータは、2001年以降、エジプト現地にて取得されたものです。とりわけ、職場の特別研究期間制度を利用して2006年春から夏にかけてエジプトに滞在し、調査に没頭できたことは大きな収穫となりました。関係各位に深く感謝申し上げます。また、現地調査に際しては、ムハンマド・カーリッド氏の協力を得ました。氏のドライバーとしての嗅覚は、確実に調査地へと私を導いてくれました。

本稿を草するにあたり、小泉龍人先生のご指導を仰ぎ、有益なご助言を頂戴しました。また、齋藤久美子氏は草稿を閲読してくれ、マシュー・ジョージ氏は英文概要の作成に協力してくれました。さらに査読の方々は有益なコメントをお寄せ下さいました。記して感謝いたします。

## 註

- 1) ザンカルーンの窯は、その形状がシャイット・ターバーン(フスタート)に似ている。工房のルーツを同方面に求めることは可能かも知れない。
- 2) なお、カイロ近郊パドラシェーンで聞き取り調査を実施した際、同地区では5年ほど前に土器づくりがなくなってしまったが、職人がザンカルーンに移ったのではないかという情報を耳にした。しかし、そのような状況は確認されなかった。
- 3) 後で検討する考古資料のうち、北シナイ、Site A-345の事例はアリーシュに近く、両者の関連が窺われる。本稿註18)を参照のこと。
- 4) マシ・ハーディーでは黒色土器の焼成を実見した。その概要は以下の通りである。最高到達温度は窯頂部で652℃(火元近くは800℃前後か)と低いものの、じっくりと時間をかけて焼成し、最後の1時間は600～650℃をキープする。作品に十分火が通ったことを確認すると、焚口から水をかけて強制的に消火しつつ、焚口をレンガと泥で密閉してしまう。その後、頂部の開口部分も塞ぎつつ、重油を流し入れる。陶工は窯を素早く密閉することに特に注意を払っていた。密閉後は、自然に冷却するのを待って、取り出しとなる。
- 5) 取材した工房では、ここに地元出身の陶工1名が加わる。このことは、ビルベイスという新しい土地へ移転してきたことに対する配慮であると考えられる。主人とその妻による家族経営でありながら、地元出身の陶工がこれに加わる珍しい事例である。
- 6) 筆者の聞き取りによれば16の集団が土器づくりに従事するといいい、これは窯の数とも一致する(佐々木・齋藤 2002: 90)。しかし別の報告では、100名の陶工が30の生産単位に分かれて生産に従事するといいい(Kooij and Wendrich 2002: 152)、注意が必要である。
- 7) なお、工芸の専門化を論ずる際、専門は一般に独立専門と従属専門に区分される(西秋 2000: 3-5)。独立専門を一般マーケットの需要に対する生産行為と定義するならば、古代エジプトというフィールドで想定される土器生産様式のうち、②世帯内産業、③個人工房生産、④集中工房生産は独立専門と規定されるであろう。王朝成立後ほどなくして、遅くとも古王国時代までには土器生産における従属専門が始まったとされる古代エジプトでは(Bourriau et al. 2000: 141)、従属専門による土器生産の存在を認めつつも、並列的に存在したと考えられる独立専門の諸段階を細分しようとする意識が強い。こうした試みを深化させるべく、本稿でもこれらの分類を検討の出発点とした。
- 8) 本稿では世帯内生産と世帯内産業を峻別し得なかったが、自家消費用の土器を生産する世帯内生産が存在し得たことは事実と思われる(cf. 齋藤・鈴木 2007: 45)。しかし、ライス(P.M.Rice)

- が世帯内生産の一例に挙げたフィリピン・カリンガ族の事例でも(Rice 1987: 184)、確かにダングタラン村では各家庭が土器づくりに従事することが報告されているものの(Longacre 1981: 52)、この村は土器づくりに特化しており、生産品は交易品ともなっている(小林 1993a: 78)。民族誌を援用したとしても、世帯内生産を厳密に峻別することは困難であるようだ。
- 9) エジプトの土器研究者が依拠したライスの研究においても、集合工房と共同工房の区別は曖昧である(Rice 1987: 184)。なおライスによれば、この段階の土器生産は男性によってなされるとされ、少なくとも集合工房の段階で女性の作業参加が目立つエジプトの民族誌情報とは矛盾している。
- 10) 共同工房においては、血縁関係にない男性が集まることで女性が排除された可能性が指摘される。そこには男女隔離の顕著なイスラーム独特の社会規制が作用したとの想定は成り立ち得る。しかし、たとえばグリースといった大規模な集合工房では、血縁関係を越えた人間交流がある一方で、男女隔離はほとんど認められない。イスラーム特有の社会規制については、別のアプローチを試みるのが妥当であろう。
- 11) デルタでの聞き取り調査の際、ガウィーシュやグレースといった大規模な集合工房は土器生産地として仲買人によく知られていた。集合工房が成立した要因については、工房が集って「特産品」をつくることで、流通の起点となり得た点を指摘できるかも知れない。こうした背景に、デルタ特有の人口動態などが関連しつつ、ナイル河谷とは異質な生産様式を確立したのであろう。
- 12) 民族誌における性別分業について検討したマードック(G.P.Murdock)の研究を参照すると、アフリカにおける土器づくりの事例24のうち、男性が土器をつくるのは1例に留まっている(Murdock and Provost 1973: Table 8を集計)。アフリカの土器づくりにおける際立った女性優位は他地域と比べても顕著であり、エジプトの世帯内生産が女性によってなされることは、これに準拠すると考えられる。一方で、その次の段階以降、男性が主たるつくり手となっていくことはエジプトの特色となっている。性別分業の変遷を辿ることが重要な課題であると理解されるであろう。
- 13) 査読の方から、集合工房は近代的・現代的なものではないかとの指摘を受けた。確かに現状においては、集合工房と思われる考古学的痕跡は極めて希薄である。しかしながら、集合工房における男性の製作を女性が補助するという土器生産の在り方は、個人工房(男性と女性の共同作業)と共同工房(男性のみによる生産)のギャップを埋める中間的な事例となり得る。よって、作業仮説として、集合工房という生産様式を設定しておくことは意義深いというのが筆者の立場である。註20)も参照のこと。
- 14) 筆者はかつて、古代エジプトの土器焼成窯についてまとめたことがある(齋藤 1998)。そのときに集めた情報を見直し、土器工房の占有面積に関する情報を抽出できる事例を、ここでは参照として掲げた。
- 15) アイン・アシルでは複数の時期の工房が検出されており、より残存状況の良好な事例をここでは掲げた。時期によっては規模の小さな土器工房が展開した可能性に配慮するべきであろう。
- 16) アマルナでは別の土器焼成窯も検出されている(Nicholson 1989: Figure 3.15)。しかしこのデータは工房の境界が不明瞭で、占有面積を算出するに至らなかったため、本稿では検討の対象とはしなかった。
- 17) 同工房が出土したエリアについては、居住域とは判断できないとの見解もある(Borriau et al. 2000: 139)。この工房の立地については注意が必要であろう。

- 18) なおこの事例は、ガウィーシュの陶工たちの出身地であるアリーシュに近く、比較資料として注目される。このような個人工房を単位とする生産伝統の延長線上に、現在のガウィーシュの事例を位置付けることができるであろう。
- 19) ただし、図4-1中に示した工房には、左上方にさらに建造物が続いている。これを土器工房に含める場合には、トータル90m<sup>2</sup>ほどとなり、個人工房としては大きなものに分類されるであろう。
- 20) 前項で確認されたように、大規模な集合工房はデルタにおいて特に目立っている。こうした生産様式はデルタ特有のものであり、考古学的に遡ることが難しいという見解を完全に否定することは難しい。しかしながら、小規模の集合工房はデルタにも存在し(ザンカルーン、マシ・ハーディー)、またナイル河谷にも同様の集合工房が認められた(ヒガーザ)。今後、大規模な集合工房が考古学的に検出される可能性を否定しない立場を取りたい。

## 参考文献

- Arnold, Do. and J. Bourriau (eds.) 1993 *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Bietak, M., J. Dörner, I. Hein and P. J. nosi 1994 *Stratum IV: Das frühe Neue Reich (ca. 1540-1390) (Neue Grabungsergebnisse aus Tell el-Dab' a und ' Ezbet Helmi im östlichen Nildelta (1989-1991))*. *Ägypten und Levante* IV, 32-38.
- Bourriau, J. D., P. T. Nicholson and P. J. Rose 2000 *Pottery*. In Nicholson, P.T. and Shaw, I.(eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 121-147. Cambridge, Cambridge University Press.
- Brissaud, P. 1982 *Les Ateliers de Potiers de la Région de Louqsor*. Le Caire, IFAO.
- Hope, C. 1980 Dakhleh Oasis Project: Report on the study of the pottery and kilns. *Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 10-4, 283-313.
- van der Kooij, G. and W. Wendrich 2002 The Potters of el-Fustat(Cairo) and el-Nazla(Fayoum). In W. Wendrich and G. van der Kooij (eds.), *Moving Matters/ Ethnoarchaeology in the Near East*, 147-158. Leiden, CNWS Publications.
- Longacre, W. 1981 Kalinga pottery: an ethnoarchaeological study. In I. Hodder, G. Isaac and N. Hammond (eds.), *Pattern of the past: Studies in honour of David Clarke*, 49-66. Cambridge Univ. Press, New York.
- Murdock, G.P. and C. Provost 1973 Factors in the Division of Labor by Sex: A Cross-cultural Analysis. *Ethnology* 12-2, 203-225.
- Nicholson, P.T. 1989 Report on the 1987 Excavations: The Pottery Kilns in Building Q48.4. In B. J. Kemp (ed.), *Amarna Reports* V, 64-81. London, Cambridge University Press.
- Nicholson, P.T. 1995a Kiln excavations at P47.20(House of Ramose Complex). In B. J. Kemp (ed.), *Amarna Reports* VI, 226-238. London, Cambridge University Press.
- Nicholson, P.T. 1995b The Potters of Deir Mawas, An Ethnoarchaeological Study. In B. J. Kemp (ed.), *Amarna Reports* VI, 279-308. London, Cambridge University Press.
- Nicholson, P.T. 2002 Deir Mawas and Deir el-Gharbi: Two Contrasting Ceramic Traditions. In W. Wendrich and G. van der Kooij (eds.), *Moving Matters/ Ethnoarchaeology in the Near East*, 139-146. Leiden, CNWS Publications.
- Nicholson, P.T. and H. L. Patterson 1985 Pottery making in Upper Egypt: an ethnoarchaeological study. *World Archaeology* 17-2, 222-239.
- Oren, E.D. 1987 The "Way of Horus" in North Sinai. In A. F. Rainey (ed.),

- Egypt, Israel, Sinai: Archaeological and Historical Relationships in the Biblical Period*, 69-119. Jerusalem, Tel Aviv University Press.
- Peacock, D.P.S. 1982 *Pottery in the Roman World: an ethnoarchaeological approach*. London and New York, Longman.
- Redomount, C. A. 2002 The Egyptian Modern Pottery Project: Pilot Phase Findings. In C. A. Redmount, and C. A. Keller ( eds.), *Egyptian Pottery: Proceedings of 1990 Pottery Symposium at the University of California, Berkeley*, 153-355, Berkeley, University of California Publications.
- Rice, P.M. 1987 *Pottery Analysis: A Sourcebook*. Chicago and London, The University of Chicago Press.
- Soukiassian, G., M. Wuttman, L. Pantalacci, P. Ballet and M. Picon 1990 *Les Ateliers de Potiers d'Ayn-Asil*. Le Caire, IFAO.
- Stadelmann, R. 1983 Die Pyramiden des Snofru im Dahachur: Zwiter Bericht über die Ausgrabungen an der Nördlichen Steinpyramide. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39, 225-241.
- Verner, M. 1992 The Discovery of a Potter's Workshop in the Pyramid Complex of Khentkaus at Absir. *Cahiers de la céramique égyptienne* 3, 55-59.
- 小泉龍人 2000 「古代メソポタミアの土器生産：製作技術と工房立地から見た専門化」『西アジア考古学』1号 11-31頁 日本西アジア考古学会。
- 小林正史 1993a 「カリंगा土器の製作技術」『北陸古代土器研究』3号 74-103頁。
- 小林正史 1993b 「稲作文化圏の伝統的土器作り技術」『古代文化』45巻 11号 27-50頁。
- 齋藤正憲 1998 「古代エジプトの土器焼成窯」『文明の考古学』119-135頁 海鳥社。
- 齋藤正憲 2005 「エジプト、ファイユーム・ナズラの叩き成形」佐々木幹雄・齋藤正憲（編）『世界の土器づくり』105-120頁 同成社。
- 齋藤正憲 2007 「エジプトの土器づくり民族誌」『日本西アジア考古学会第12回総会・大会要旨集』37-42頁 日本西アジア考古学会。
- 齋藤正憲・佐々木幹雄・三好伸明 2003 「エジプト、ダクラ・オアシスの土器づくり」『エジプト学研究』11号 5-29頁 早稲田大学エジプト学会。
- 齋藤正憲・佐々木幹雄・三好伸明 2004 「エジプト、シーワ・オアシスの土器づくり」『エジプト学研究』12号 75-100頁 早稲田大学エジプト学会。
- 齋藤正憲・鈴木勝陽 2007 「台湾原住民の土器づくり：蘭嶼ヤミ族の事例」『教育と研究』25号 45-70頁 早稲田大学本庄高等学院。
- 佐々木幹雄・齋藤正憲 2002 「エジプト・ファイユーム、ナズラの土器づくり」『エジプト学研究』10号 119-135頁 早稲田大学エジプト学会。
- 佐原真 2008 『縄紋土器と弥生土器』 学生社。
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店。
- 西秋良宏 2000 「工芸の専門化と社会の複雑化：西アジア古代都市出現期の土器生産」『西アジア考古学』1号 1-9頁 日本西アジア考古学会。

齋藤 正憲

早稲田大学本庄高等学院

Masanori SAITO

Honjo Senior High School, Waseda University